

親子関係と子どもの自己活動(7) — “いたずら” について —

中原弘之*・黒川潤**・臼井智恵子**・杉山庸子**・竹之内美登里**・沼田育子**・古沢悦美**
三浦千晶**・山岸みどり**・若林政代**・小田尚美**・小林克宏**・柴田純江**
(1989年3月31日受理)

The Effects of the Parent-Child Relationships on the
Children's Self-Activities (7): Examination of
“Childish Mischief”

Hiroyuki NAKAHARA, Jun KUROKAWA, Chieko USUI, Yoko SUGIYAMA, Midori TAKENOUCHI
Ikuko NUMATA, Etsumi FURUSAWA, Chiaki MIURA, Midori YAMAGISHI
Masayo WAKABAYASHI, Naomi ODA, Katsuhiko KOBAYASHI and Sumie SHIBATA

キー・ワード：遊び，生活経験，親子関係，発達

Abstract

The purpose of this study is to discuss a relationship between children's early experiences, which are about their perceptions of their parents' attitudes toward their mischief and mischief itself, and children's current experiences that are about peer relationships and *ijime* or bullying other children at school.

We asked our participants, 364 primary school children and 394 junior high school students, to answer a questionnaire which was designed to measure (A) how they desire to do mischief, (B) how their mother tolerates their mischief, (C) how they are worried either at school or at home, and (D) if they did *ijime* toward others or not.

The main findings are as follows: ①As to desire to do mischief, boys showed significantly stronger desire than girls; older children showed significantly stronger desire than younger children; children who have experiences of being bullied have significantly stronger desire than children who have no such experiences. ②As to mother's toleration, boys are significantly more tolerated than girls, and older children are significantly more tolerated than younger children. But children who have experiences of being bullied are significantly less tolerated.

* 茨城大学教育学部教育心理学教室 Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Ibaraki University

** 茨城大学教育学部 “遊び” セミナール, “Play” Seminar, Faculty of Education, Ibaraki University.

1. 問題の所在

「親子関係と子どもの自己活動」というテーマで、子どもの遊びの問題を軸にして親子関係を解明しようとするわれわれの試みは、すでに10年の年月を費し、第7号の成果を今ここにまとめようとしている。第1号から第5号までは、専ら子どもの遊びの概念について、親や子どもの意識調査を基本とした検討を重ね、一応、われわれとしての遊びの概念を、「解放感に伴い、行動それ自体に目的意識を有する自己活動」と規定し、遊びに対する態度やイメージを測定する尺度化をもすすめてきた。^{1)~5)}

このような検討の中で、子どもの遊びに対する親の態度(とりわけ、許容という点について)がさまざまであり、幼児期や児童期における子どもの遊び経験に、親の態度が強く関与しており、それが子どもの人間形成にまで影響を及ぼしている可能性が濃厚になったので、第6号⁶⁾においては、子どもの“いたずら”という具体的な行動場面に焦点を置き、いたずらの実情を捉えるための尺度づくりを兼ねて、いくつかの特色を見出すことができた。

前回の研究で指摘したように、昔の子どもと今の子どものいたずらは、その質や量において同じではなくなっている。かつては、ごく自然に生活に取り入れていたいたずらが、現代の子どもの生活の中から消えてしまっているようである。しかも、子どもの性や年齢発達によって大きな相違が見出された。これに加えて、いたずらに対する父親と母親の許容の程度にも予想されたような違いが認められた。

子どもたちが遊びの中で行ういたずらは、そのほとんどが大人から注意される可能性を持っている。だから見つからないように隠れてやるのであるが、それだけにスリルがあり、鬱積したストレスを解消する手段として絶妙であった。それだけでなく、いたずらの後に押し寄せてくる罪の意識を味わいながら、行為の善悪を学び、自己の統制力を培うことにも有効であった。しかし、最近においては、子どもの遊びの中からいたずらが減少しつつある、というよりは、いたずらを好まなくなってきたと同時に、大人も、いたずらを許容しなくなってきたと考えるべきかもしれない。当然、いたずら経験の減少が、子どもの他の生活面に何らかの影響を及ぼす筈であろう。

今回は、このような問題意識に基づいて、まず、子どもの意識面から、いじめとの関連性を分析することにした。

2. 研究目的

子どもから得られた、いたずらに対する願望、いたずらに対する母親の許容度の推定、家族での悩み、学校での悩み、いじめられ経験、いじめ経験、についての資料と、母親から得られた、子どもの遊びに関するイメージ、いたずらに対する許容度についての資料との相互の関連性を、年齢発達や性別をふまえながら分析しようとするものであるが、今回は取り敢えず、子どもから得られた資料に限定して、資料間の相互の関係を明らかにしてみたいと思う。

3. 研究方法

3-1 調査の対象

この調査は、茨城県結城市立結城小学校、並びに同市立結城中学校の協力を得て行われ、両校を合わせ848名の児童・生徒を対象に回答を求めた結果、表1に示したように、758名の有効データが得られた。

表1 調査の対象

調査対象機関	学年	男	女	計
結城市立結城小学校	5	96	87	183
	6	82	99	181
結城市立結城中学校	2	200	194	394
計		378	380	758

3-2 調査内容

本研究で用いた子どものいたずらを調べる調査項目は、前回の研究で用いた20項目をそのまま使用した。調査内容は、①子どものいたずら願望、②子どものいたずらに対する母親の許容、③家庭における悩み・学校における悩み、④いじめられ経験・いじめ経験、からなっている。②の母親の許容は、いうまでもなく子どもによる推定である。尚、フェイスシートとして氏名、学年、組、性別、兄弟構成をきく欄が用意された。

回答はそれぞれ次のような形式で求めた。①子どものいたずら願望については、“やる、やらないは別として、あなたの気持ちに一番あてはまるところに○をつけて下さい”のような教示で、「とてもやりたい」「できればやりたい」「どちらともいえない」「あまりやりたくない」「全くやりたくない」の5段階尺度で回答を求めた。

②子どものいたずらに対する母親の許容については、“もしあなたが、これらのいたずらを行ったことをお母さんが知ったとしたら、あなたに対して、お母さんはどうすると思いますか”という教示で、「強くしかるだろう」「かるくしかるだろう」「なにもいわないだろう」の3段階尺度で回答を求めた。願望についての回答尺度を「やりたい」という肯定的な見方から「やりたくない」という否定的な見方まで、5段階で表したのに対し、許容を3段階尺度にしたのは、實際上、いたずらを肯定的な見方から否定的見方へと両極的にみることは、現実的ではないだろうという判断からであり、肯定的な見方を省き、「しかる」という否定的な立場から、「なにもいわない」という中間的立場までの尺度で表わすことにしたのである。

③家庭における悩み・学校における悩み、④いじめられ経験・いじめ経験については、端的に事実を回答してもらえるように「よくあった」「時々あった」「全くなかった」の3段階尺度で回答を求めた。尚、ここでの本当のねらいは、④によるいじめの実態をとらえることであったが、回答者への質問内容の刺激性を配慮して、それらを緩和する意味で、先に③の家庭・学校における悩みについての質問を配置した。

以上の調査内容については巻末の調査表を参照されたい。

3-3 調査の手続きと期日

本調査の依頼と、実施の説明及び調査用紙の配布のため、われわれの代表が調査校を訪れた。そ

の後日、本調査は各教室ごとに担任の指示に従って実施され、一週間後に回答用紙を回収した。尚、この調査の期日は1988年7月である。

3-4 データ処理

まず、回答されたデータの中からロスデータの選別作業を行い、表1に示したような有効データを得た。このデータに基づいて次のような処理を行った。

①項目別集計

いたずら願望、いたずら許容、悩み、いじめられ・いじめ経験に関する各項目別に回答の状況を学年別、性別、全体について集計した。

②得点の算出

いたずら願望においては、「とてもやりたい」から「全くやりたくない」までの5段階に対し1点から5点を、いたずら許容においては「強くしかるだろう」から「なにもいわないだろう」まで3段階に対し1点から3点を与え、それぞれの20項目についての得点合計を算出して、いたずらの願望得点と許容得点を個人別に求め、各々の得点の分布状況を学年別、性別、全体について調べた。

③クロス集計

次のような質問間の交絡を行い分散分析を用いて特色を調べることにした。

㉑いたずらの願望得点と許容得点との間の関係。

㉒いじめられ経験・いじめ経験と学年・性による特色。

㉓いたずら願望・いたずら許容のそれぞれと、いじめられ経験・いじめ経験との学年・性による特色。

㉔いたずら願望・いたずら許容のそれぞれと、家での悩み・学校での悩みと学年・性による特色。

以上のデータ処理は、東京大学大型計算機センターの統計分析プログラムパッケージSPSSXを利用して行われた。

4. 研究結果と考察

4-1 いたずら願望

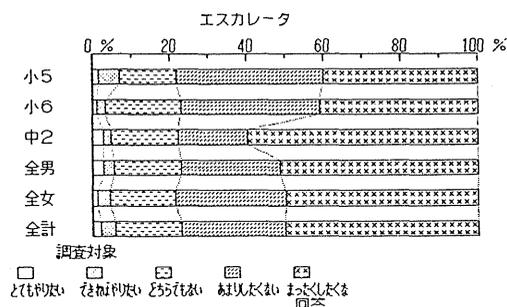


図1-1 いたずら願望

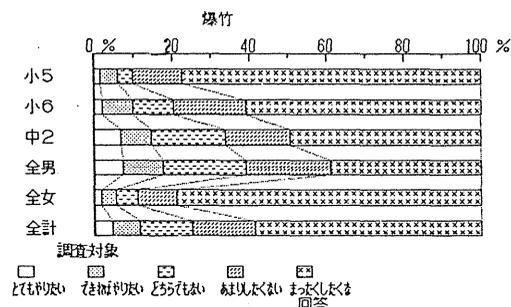


図1-2 いたずら願望

中原他：親子関係と子どもの自己活動(7)

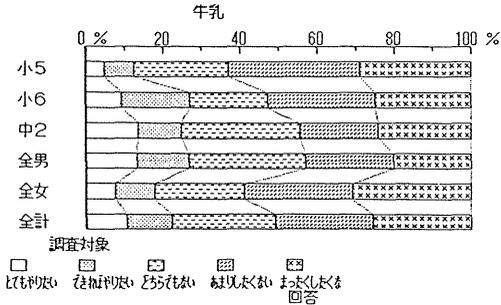


図1-3 いたずら願望

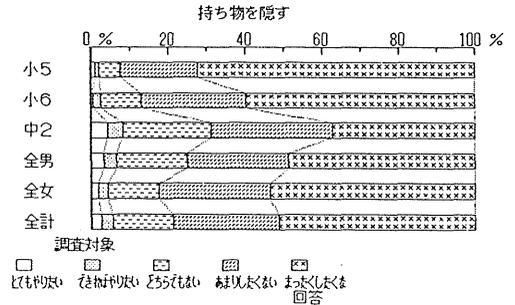


図1-4 いたずら願望

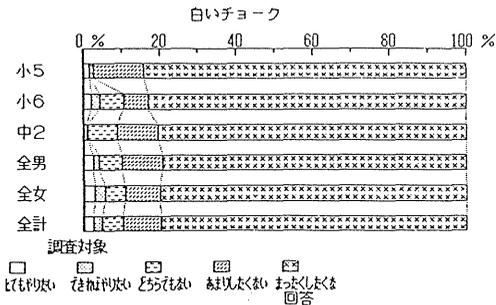


図1-5 いたずら願望

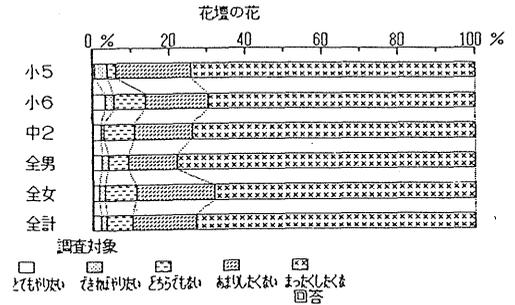


図1-6 いたずら願望

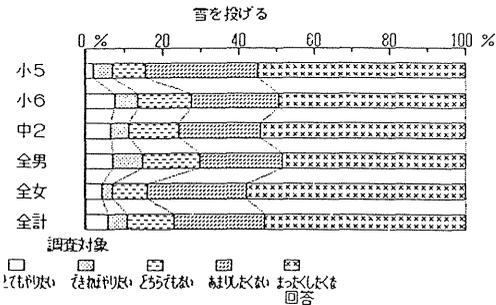


図1-7 いたずら願望

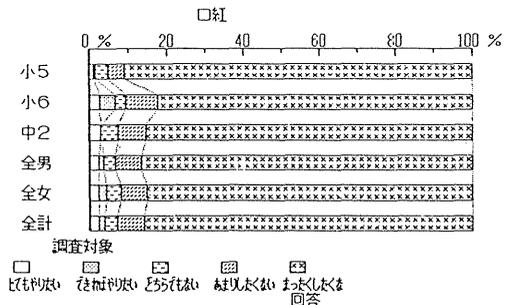


図1-8 いたずら願望

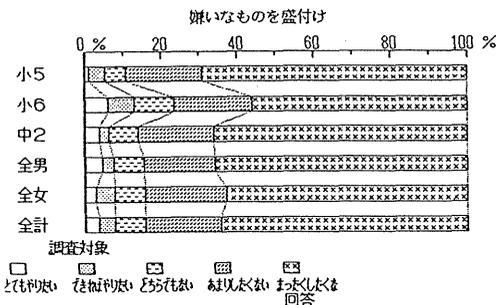


図1-9 いたずら願望

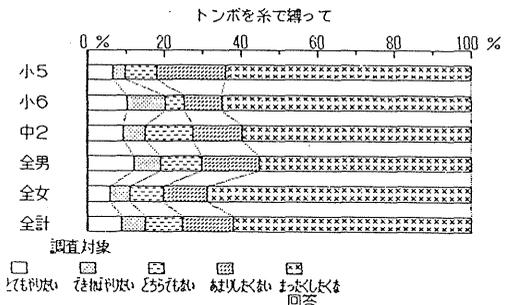


図1-10 いたずら願望

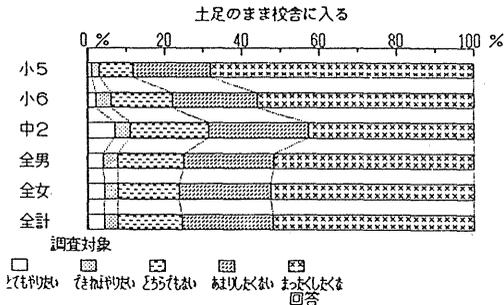


図 1-11 いたずら願望

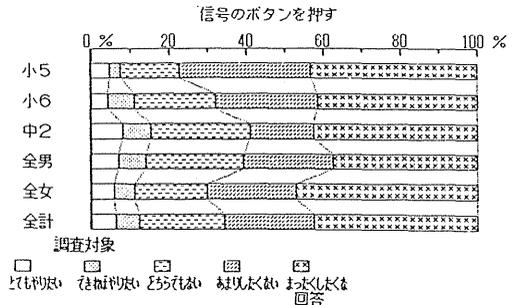


図 1-12 いたずら願望

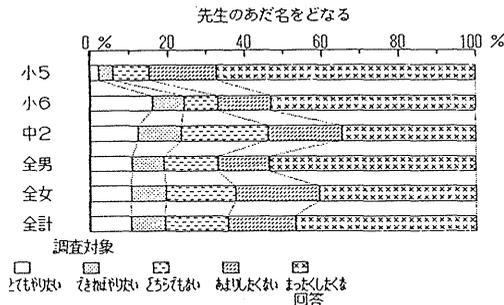


図 1-13 いたずら願望

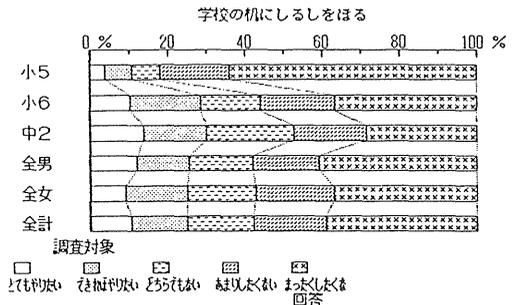


図 1-14 いたずら願望

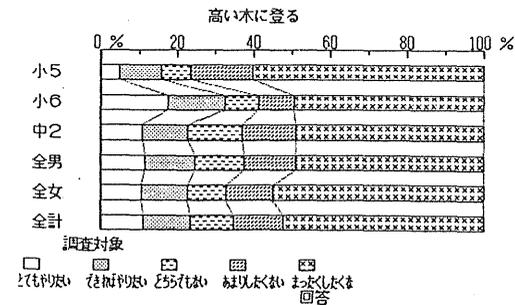


図 1-15 いたずら願望

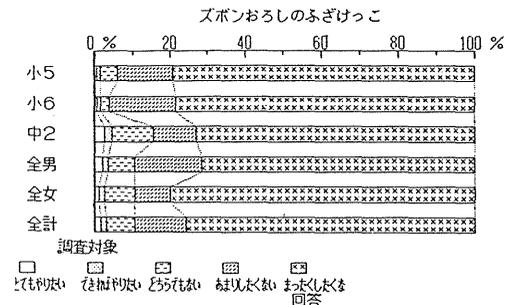


図 1-16 いたずら願望

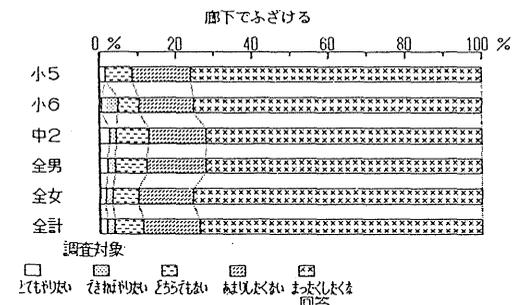


図 1-17 いたずら願望

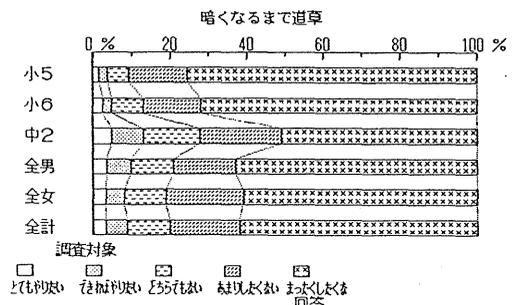


図 1-18 いたずら願望

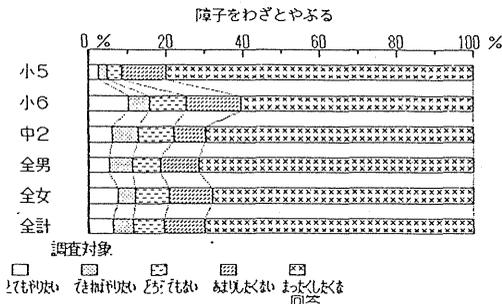


図1-19 いたずら願望

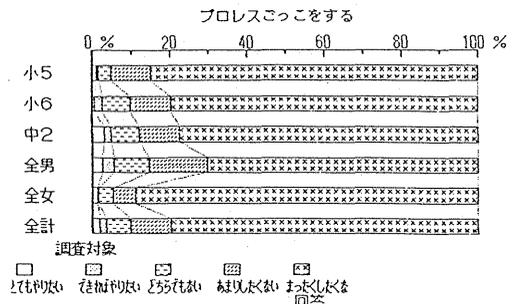


図1-20 いたずら願望

まず、いたずら願望に関する単純集計データ(図1-1~20)から、年齢並びに性別の特色を視覚的に読み取った結果、年齢が上がるにつれて願望が強くなる項目は、「2. 大人のいない原っぱで爆竹をならす」「3. 牛乳を飲んでいる人を笑わせる」「11. 誰も見ていないので土足のまま校舎に入る」「12. 信号の押しボタンを渡らないのに押す」「14. 卒業記念に学校の机にしるしをほる」「18. 学校の帰り、暗くなるまで道草をする」であった。また、その逆として、年齢が上がるにつれて願望が弱くなる項目は、「1. 用もないのにデパートのエスカレーターで昇り降りする」であった。さらに、年齢発達的に見ると小学校6年生において、特別に願望が強い項目がいくつか見られた。それは、「9. 給食の時、友達に嫌いな物を盛りつける」「10. トンボを糸で縛って、飛ばしながら遊ぶ」「13. みんなで先生のあだ名を大声でどなる」「15. 屋根よりも高い木に登る」「19. 貼りたての障子をおもしろがってわざとやぶる」の5項目であった。

次に全体的な傾向について見ると、“全くやりたくない”という回答が大変多く、最近の子ども達はいたずらに関して消極的であると言えよう。しかし、“とてもやりたい”と“できればやりたい”をいたずら強願望群，“全くやりたくない”と“あまりやりたくない”をいたずら弱願望群と名づければ、「3. 牛乳を飲んでいる人を笑わせる」「13. みんなで先生のあだ名を大声でどなる」「14. 卒業記念に学校の机にしるしをほる」「15. 屋根よりも高い木に登る」などの項目は、比較的いたずら強願望群の回答割合が多く、2割を越えている。

さらに、性差について考察してみると、明らかに男子の方がいたずら願望が強く、わずかに女子の方は「5. 授業参観日にわざと白いチョークに色をぬっておく」においてのみ、いたずら願望が男子より強かった。また、いたずら強願望群といたずら弱願望群における性差に着目すると、両群において差がみられない項目として、「1. 用もないのにデパートのエスカレーターで昇り降りする」「8. 母親の大切にしている口紅を、クレヨンがわりにして絵を描く」「9. 給食の時、友達に嫌いな物を盛りつける」「11. 誰も見ていないので土足のまま校舎に入る」「18. 学校の帰り、暗くなるまで道草をする」であった。しかし、いたずら強願望群では性差は見られないが、いたずら弱願望群で性差が見られた項目がいくつかあった。男子において“全くやりたくない”という回答が多かったのは、「6. たくさんある花壇の花を1本ぬく」「13. みんなで先生のあだ名を大声でどなる」「14. 卒業記念に学校の机にしるしをほる」「19. 貼りたての障子をおもしろがってわざとやぶる」の4項目であり、女子において“全くやりたくない”の回答が多かったのは、「15. 屋根よりも高

い木に登る」「16. 更衣室でズボンおろしのふざけっこをする」「17. よそのクラスで授業をしている時にわざと廊下でふざける」の3項目であった。このことから、男子は概して、学校に関するいたずらに対して、非常に消極的であると言えよう。また、女子においては、いわゆる“男っばい”いたずらに対して、拒否反応を示しているのではないだろうか。

表2に示したいたずら願望得点分布は、“とてもやりたい”を1点、“全くやりたくない”を5点とし、20項目あるので、得点の分布範囲は20～100点となる。したがって、点数が高いほど弱願望度が増すことを示している。この得点分布から、小学校5年生の中央値は92.00、小学校6年生は88.00、中学校2年生は86.00であり、年齢が上昇するにつれ、いたずら願望が強くなっていることがわかる。また、性差に関しては、男子の中央値は86.00、女子のそれは89.00であり、女子の方が弱願望の回答へと傾いている。最後に、全体的に見ると中央値は88.00で、いたずら願望は「あまりやりたくない」と「全くやりたくない」の中間に位置しており、年齢・性別どちらの観点から見ても、現代の子ども達のいたずら願望は非常に低く、冷めていると言えるだろう。

表2 いたずら願望得点の分布

	男	女	小5	小6	中2	全
MEDIAN	86.00	89.00	92.00	88.00	86.00	88.00
VARIANCE	191.36	153.07	97.64	173.44	194.01	173.62
KURTOSIS	3.42	1.63	7.53	0.39	2.93	2.85
SKEWNESS	-1.54	-1.27	-2.21	-0.99	-1.39	-1.44
RANGE	80	71	67	59	80	80
MINIMUM	20	29	33	41	20	20
MAXIMUM	100	100	100	100	100	100

表3 いたずら許容得点の分布

	男	女	小5	小6	中2	全
MEDIAN	36.00	33.00	29.00	33.00	38.00	35.00
VARIANCE	76.86	60.13	41.13	54.79	65.33	70.06
KURTOSIS	-0.54	-0.32	2.48	-0.68	-0.37	-0.41
SKEWNESS	0.25	0.38	1.10	0.22	0.12	0.35
RANGE	40	40	40	31	40	40
MINIMUM	20	20	20	20	20	20
MAXIMUM	60	60	60	51	60	60

4-2 いたずらの許容

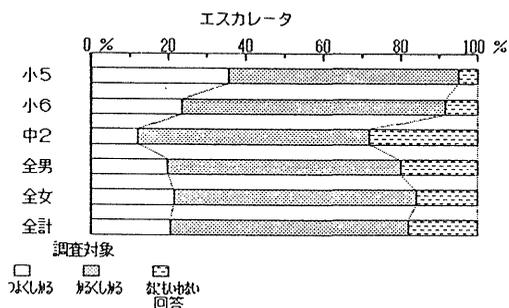


図2-1 いたずら許容

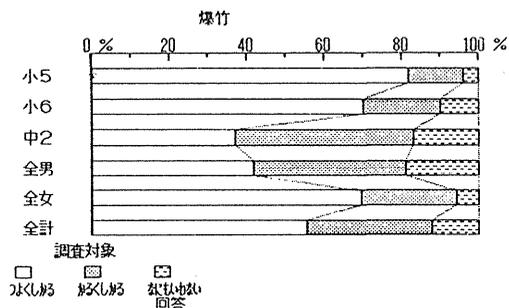


図2-2 いたずら許容

中原他：親子関係と子どもの自己活動(7)

図2-3 いたずら許容

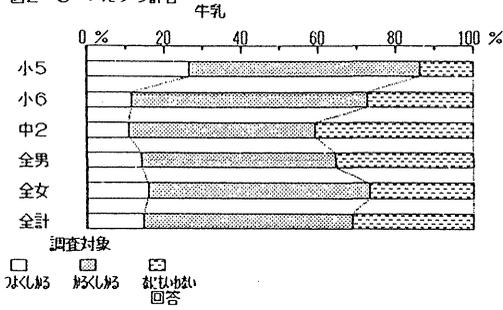


図2-3 いたずら許容

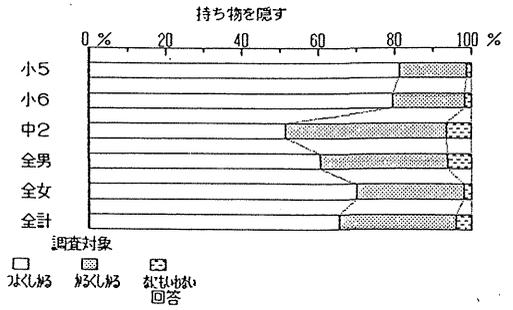


図2-4 いたずら許容

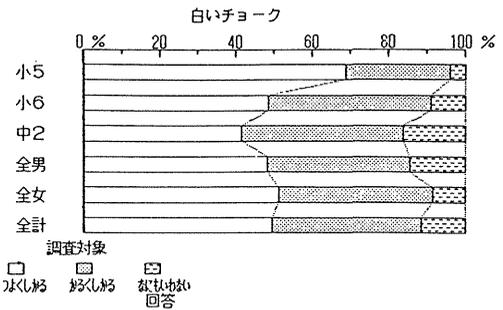


図2-5 いたずら許容

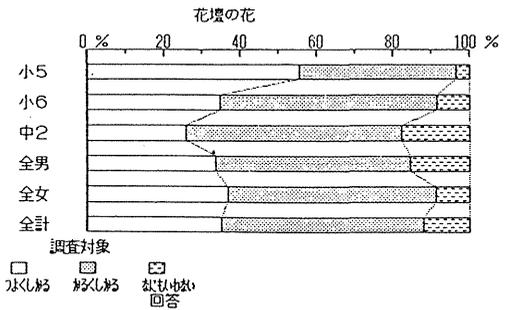


図2-6 いたずら許容

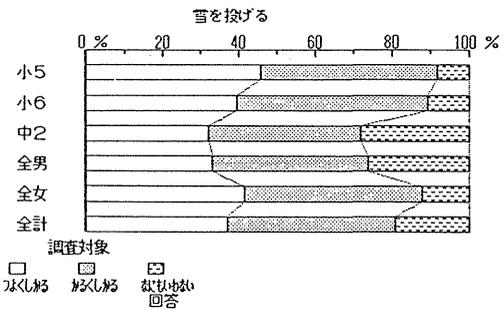


図2-7 いたずら許容

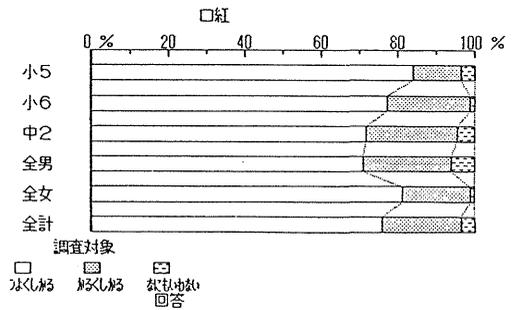


図2-8 いたずら許容

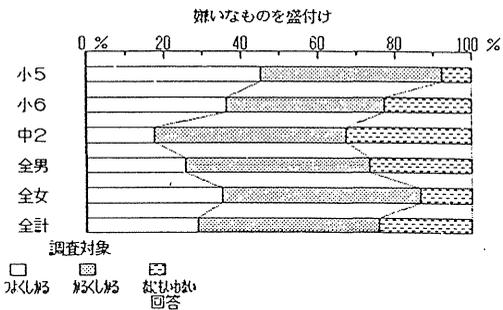


図2-9 いたずら許容

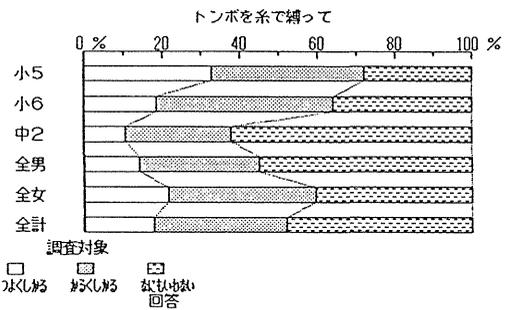


図2-10 いたずら許容

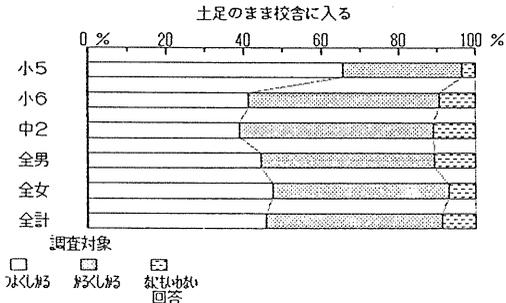


図 2-11 いたずら許容

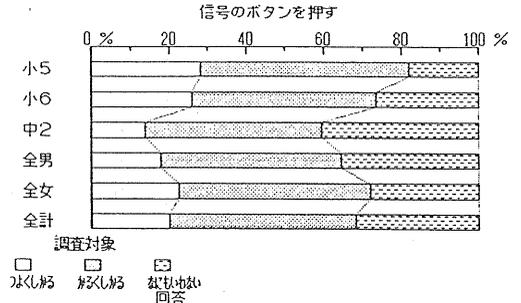


図 2-12 いたずら許容

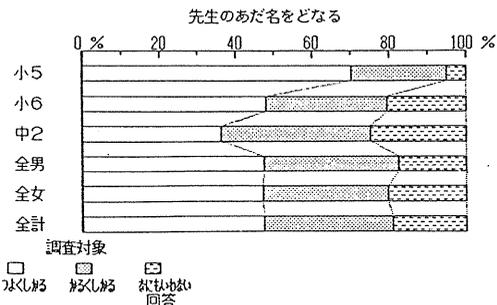


図 2-13 いたずら許容

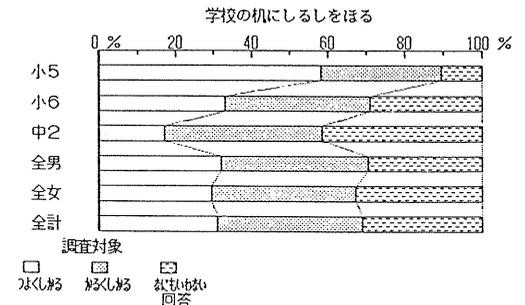


図 2-14 いたずら許容

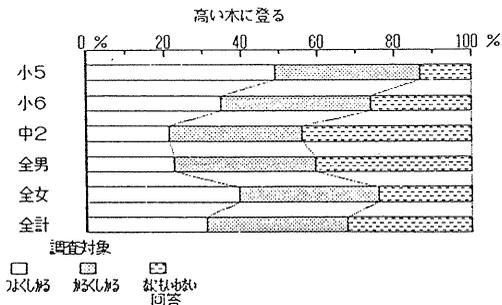


図 2-15 いたずら許容

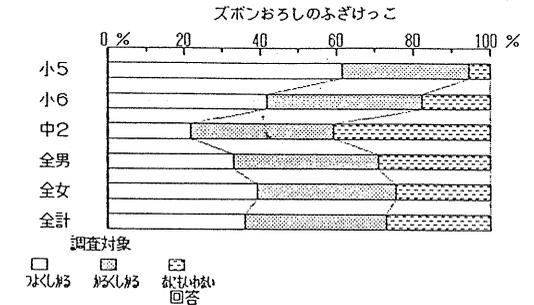


図 2-16 いたずら許容

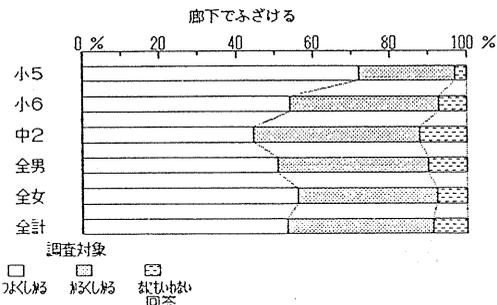


図 2-17 いたずら許容

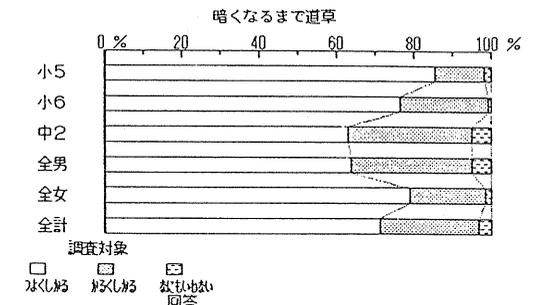


図 2-18 いたずら許容

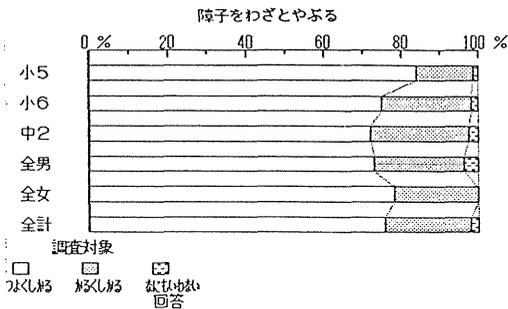


図 2-19 いたずら許容

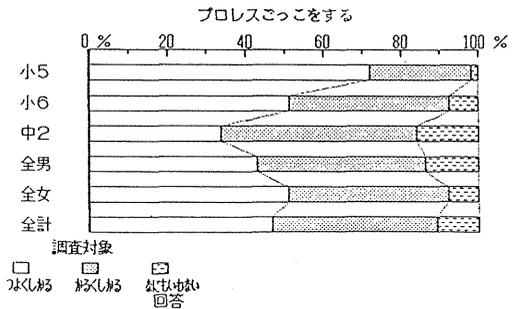


図 2-20 いたずら許容

子どものいたずらに対する母親の許容推定を3段階尺度に回答してもらった結果は図2-1~20のようになる。いたずらの願望と同様に、許容推定についても年齢と性別の関係を視覚的に読み取った結果、以下のような特色が指摘されうる。

まず、年齢の上昇とともに、すべての項目において、いたずらを許容する傾向が強くなっている。特に、年齢の上昇に伴って、著しい許容を示す項目は「2.大人のいない原っぱで爆竹をならす」「9.給食の時、友達に嫌いな物を盛り付ける」「20.給食の準備をしているそばで、プロレスごっこをする」であった。

性差について全体的に見てみると、男子の方が女子よりも許容する傾向が強いことがわかる。ただ、「13.みんなで先生のあだ名を大声でどなる」「14.卒業記念に学校の机にしるしをほる」の2項目は例外であった。

これらの結果と前項で述べたいたずら願望とを比較してみると、いたずら願望が弱い項目は、いたずら許容の幅が狭く、いたずら願望が強い項目は許容の幅が広いという特色が見出せる。さらに男子は願望が強く許容の幅も広いが、逆に女子は願望が弱いが許容の幅も狭いことがわかる。これは、長年培われてきたわが国の性役割意識によって、男子には寛容に、女子には制約を、という考えが子どもの中にも定着しているためではないかと思われる。

次に、いたずらの許容の幅が広い項目は、「1.用もないのにデパートのエスカレーターで昇り降りする」「12.信号の押しボタンを渡らないのに押す」「14.卒業記念に学校の机にしるしをほる」など公的なものに対する行為が多く見られる。反対に、いたずらの許容の幅の狭い項目は「2.大人のいない原っぱで爆竹をならす」「8.母親の大切にしている口紅を、クレヨンがわりにして絵を描く」「19.貼りたての障子をおもしろがってわざとやぶる」などの、私的なものに対する行為が多く見られる。ここでもやはり、いたずら願望が強い項目は許容の幅が広く、弱い項目は逆に許容の幅が狭くなっている。

最後に、表3に示したいたずらの許容得点分布から、女子より男子の方が中央値が大であり、いたずら許容の幅が広く、年齢では特に小学校5年生は、許容分布の範囲が狭く、得点も低い、小学校6年生から中学校2年生になるにしたがって中央値が次第に増加し、許容の幅が広がる傾向を示している。

以上のことから、いたずらに対する母親の許容の幅が予想していた以上に狭いということが印象的であった。いたずら許容についての親の考え方、大人の考え方が子どもの意識に端的に反映されているものと思われる。

4-3 悩み

子どもの悩みについての回答の様子を、学年別、性別にグラフで示したものが、右の図3-1、図3-2である。

図3-1を見ると、家庭においてなんらかの悩みを持ったことのある子どもが全体の約60%を占めていることが分かる。さらに「よくあった」という回答は、そのうちの約20%に相当する。学年別に小5、小6、中2を比較すると「よくあった」「時々あった」「全くなかった」の3つの回答の割合にほとんど差はみられない。しかし、性別では、男子よりも女子のほうが悩みを持つ者が多いと言える。

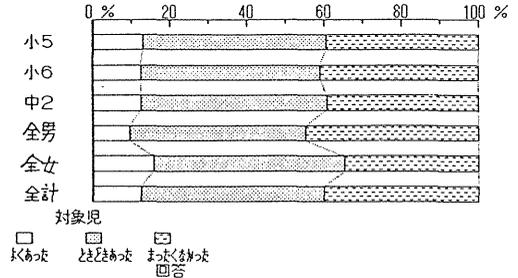


図3-1 家庭における悩み

次に図3-2を見ると、全体の約70%が学校のことでも悩んだ経験を持っており、家庭における悩みよりも多いことが分かる。「よくあった」「時々あった」の二つの回答を込みにして考えれば、学年の進行に伴って徐々に増える傾向があると言える。しかし「よくあった」という回答に注目すると、小5、中2、小6の順に増えており、6年生の突出が指摘できる。6年生は人生経験の多い中学生よりも多く、約3割が学校のことではしばしば悩んだ経験を持っている。この数字は、家庭における悩みが「よくあった」という回答の2倍以上になっている。家庭における悩みではみられないこの6年生の突出は、年齢発達の奇妙な結果である。6年生を悩ませるような不安や問題が最近になって増えたこと、あるいは、6年生が学校のことでも現在悩んでいるために「よくあった」と判断したこと、逆に中学生が小学生の頃をふり返ったとき、たいした悩みでもなかったと感じて「時々あった」と判断したために、中2の値が低くなっていること、などいくつか推測できるが、この6年生の特殊性の明確な原因は現段階では分からない。一方、性別では、男子よりも女子のほうが悩みを持つ者が多く、家庭における悩みに比べて、その差が大きくなっていると言える。

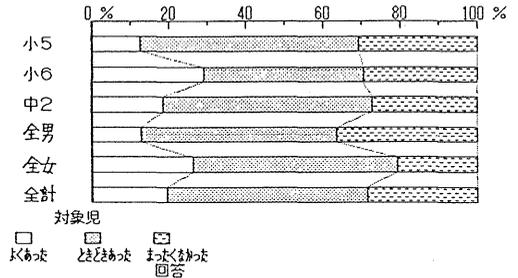


図3-2 学校における悩み

このように、家庭や学校において概して多くの子どもたちが、そして男子よりも女子が多くの悩みを持っていること、また、学校の悩みにみられた6年生の特殊性がうかがえた。

4-4 いじめ

子どものいじめに関する経験を、学年別、性別にグラフで示したものが図3-3、図3-4である。悩みについてと同様に、質問は経験を問う形式なので、学年が進むにつれて、いじめに関する経験を示す値が増大することが予想された。

ところが図3-3を見ると、いじめられた経験は、小6、小5、中2の順で少なくなっており、小学生よりも中学生のほうがいじめられた経験を持つ者が少ないことが指摘できる。これもまた、悩みのところと同様に奇妙な結果と言えよう。この理由としては、現在の中学生が小学生だった頃は今ほどいじめが多くなく、最近になって増えてきたこと、また、質問の「今までに」という言葉を解釈する中学生のタイムスパンが短く、中学生になってからの経験のみを回答したこと、あるいは、中学生が小学生時代をふり返り、その頃の友人とのいざこざをいじめだったとは考えていないこと、さらに根本的にいじめの質が変化しており、小学生と中学生では回答傾向に違いがみられること、などが推測できるが、現段階では適当な資料がないので、それを特定することはできない。

このほか学年による特色では、5年生で約半数、6年生では6割近くがいじめられた経験を持っていることに注目すべきであろう。また、性による特色としては、男子よりも女子がいじめられた経験を多く持つことがあげられる。

次に図3-4を見ると、いじめた経験は、小6、中2、小5の順で少なくなっている。特に6年生の突出が目立ち、いじめた経験を持つ者は半数を越えている。先にふれた学校における悩みのところと同様に、ここでもまた、6年生の特異性が感じられる。6年生は、いじめた経験・いじめられた経験とも最も多く、さらに、学校における悩みも多いことから、学校において、他の学年とは異なった特殊な状況の中にあるのではないかと推測される。一方、性による特色としては、女子よりも男子のほうがいじめた経験を多く持ち、いじめられた経験の結果に対し反対の特色を示している。このことから、同性間でのいじめのほか、男子が女子をいじめるというケースが考えられ、非常に興味深い結果であると言えよう。

4-5 いたずらと悩み

(1) いたずら願望と悩み

前述のように、いたずら願望は総じて低く、全体の平均は84.73で、「あまりやりたくない」と「全くやりたくない」の中間に平均が落ちる状態であった。いたずら願望と家の悩みについては、

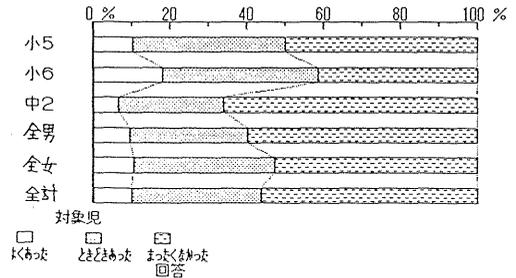


図3-3 いじめられ経験

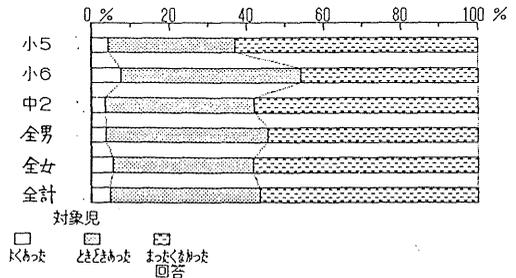


図3-4 いじめた経験

低調ながらも、家の悩みが「よくあった」「時々あった」の両回答を合わせて有悩群、「全くなかった」の回答者を無悩群とすると、有悩群は平均83.94、無悩群は平均85.90で、分散分析の結果、1%水準で無悩群のいたずら願望が有意に低かった。

いたずら願望と学校の悩みにおいては、家の悩みと同様、有悩群と無悩群に分けてみると、有悩群は平均84.41、無悩群は85.50で、分散分析の結果、有意差は認められなかった。

(2) いたずら許容と悩み

いたずらの許容は、「強くしかるだろう」「かるくしかるだろう」「何もいわないだろう」の3段階の回答尺度を用いたところ、全体の平均は35.13で、「強くしかるだろう」より「かるくしかるだろう」の近くに落ちた。いたずら許容と家の悩みとの関係を見ると、有悩群の平均は34.93、無悩群の平均は35.44で、やや無悩群が許容傾向にあるようだが両群間に有意差は見出せなかった。

いたずら許容と学校の悩みとの関係については、有悩群の許容平均は34.71、無悩群の許容平均は36.15であり、5%水準で無悩群の許容傾向のほうが有悩群のそれより有意に大きいと言えよう。

4-6 いたずらといじめ

(1) いたずら願望といじめ

次に、いじめられた経験が「よくあった」「時々あった」と回答した者をいじめられ経験群、「全くなかった」と回答した者を非経験群とすると、両群のいたずら願望の平均はそれぞれ84.49、84.91で、分散分析の結果、有意差は認められなかった。

いじめられ経験と同様、いたずら願望におけるいじめ経験群と非経験群との比較を分散分析によって行った。両群のいたずら願望の平均はそれぞれ81.32、87.31で、0.1%水準で有意差が認められた。

(2) いたずら許容といじめ

いたずら許容といじめられ経験については、前述の3段階回答尺度を用いて得られたサンプルをいじめられ経験群と非経験群とに分けてみると、前者の平均は33.57、後者は36.33で、分散分析の結果、1%水準で有意差が認められた。

いじめられ経験と同様、いたずら許容におけるいじめ経験群と非経験群との比較を分散分析によって行った。その結果、両者のいたずら許容の平均は、それぞれ35.16、35.11で、有意差は認められなかった。

以上の結果をまとめると、いたずら願望得点は、家の悩みの有無といじめの経験の有無のそれぞれの間で有意差が認められ、また、いたずら許容得点は、学校の悩みの有無といじめられ経験の有無のそれぞれの間で有意差が認められたことになる。

現段階では、これらの関係の背景について説明しうるデータは揃っていないが、これらの三者関係を分析することによって、いじめや悩みに関する子どもの心理構造を知るための、有力な資料を導き出す可能性が十分に示唆されていると思われる。今後の課題として、多変量解析などを用いて十分に吟味していく必要がある。

5. 今後の課題

本研究では、子どものいたずら願望・推定した許容・いじめ・悩みの間に興味深い関係が浮かび上がり、我々の一連の研究上実り多きものとなった。

今回は子どもサンプルのみの分析報告だったので、今後は、①母親サンプルの分析で得られた知見を報告することが、最優先されよう。

次に②母-子の関係性についての分析が待たれるところである。子どものいたずら・いじめ・悩みと母親の考え方・意識の在り方との間の関係を探ることは、一連の研究の重要な目的のひとつである。

また、③データを得ながらも、今回の分析には加えられなかった子どもの出生順位は、何らかの意味をもっている可能性があり、我々の仮説の一部でもある。媒介変数として位置づけていく必要があるだろう。

最後に、④前章末に述べたように、いたずら願望と家の悩み、いじめ経験の三者関係、いたずら許容と学校の悩み、いじめられ経験の三者関係について、何らかの分析が計画される必要があるだろう。これらについては、順次報告していく予定である。

注

- 1) 中原弘之他. 1980. 「親子関係と子どもの自己活動(1)——子どもの遊びに対する態度尺度の作成——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』29, 165-179.
- 2) 中原弘之他. 1981. 「親子関係と子どもの自己活動(2)——子どもの遊びに対する子どもと親の意識——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』30, 107-122.
- 3) 中原弘之他. 1982. 「親子関係と子どもの自己活動(3)——子どもの遊びに対する親の意識と子どもの行動——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』31, 169-184.
- 4) 中原弘之他. 1983. 「親子関係と子どもの自己活動(4)——‘遊び’概念の輪郭と質問形式の検討——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』32, 129-145.
- 5) 中原弘之他. 1985. 「親子関係と子どもの自己活動(5)——父・母・子関係についての予備的研究——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』34, 297-314.
- 6) 中原弘之他. 1988. 「親子関係と子どもの自己活動(6)——いたずらについて——」『茨城大学教育学部研究所紀要(教育科学)』20, 1-12.

〔後記〕

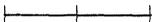
本研究は、“遊び”についての自主ゼミナールの場で掘り下げ、練り上げてきた一連の研究上に成り立っているが、特に、結城市立結城小学校および同市立結城中学校の先生方、児童・生徒の皆さんと保護者の皆さんの協力が得られたお陰であり、ここに心からお礼を申し上げる次第である。

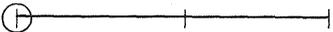
また、データ処理にあたり、貴重な時間を割いて下さった本学教育学部の本田敏明、小島秀夫両氏にも謝意を表す。さらに玉城文子氏には、ゼミ員として集計処理の段階まで協力を頂いた。

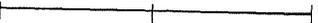
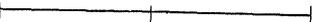
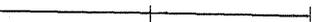
全くやりたくない
あまりやりたくない
どちらともいえない
できればやりたい
とてもやりたい

- | | |
|---|-------|
| 5. 授業参観日にわざと白いチョークに色をぬっておく | _____ |
| 6. たくさんある花壇 ^{かたん} の花を1本ぬく | _____ |
| 7. 雪合戦 ^{どろ} で泥のついた雪を投げる | _____ |
| 8. 母親の大切にしている口紅を、クレヨンがわりにして絵を描く | _____ |
| 9. 給食の時、友達 ^{とも} に嫌いな物 ^{もの} を盛り付ける | _____ |
| 10. トンボを糸 ^{いと} で縛 ^{しば} って、飛ばしながら遊ぶ | _____ |
| 11. 誰 ^{たれ} も見 ^み ていないので土足のまま校舎に入る | _____ |
| 12. 信号の押しボタン ^{わた} を渡 ^{わた} らないのに押す | _____ |
| 13. みんなで先生のあだ名を大声でどなる | _____ |
| 14. 卒業記念に学校の机 ^{いし} にしるしをほる | _____ |
| 15. 屋根よりも高い木に登る | _____ |
| 16. 更衣室 ^{えいしつ} でズボンおろしのふざっこをする | _____ |
| 17. よそのクラスで授業をしている時に、わざと廊下 ^{ろうか} でふざける | _____ |
| 18. 学校の帰り、暗くなるまで道草をする | _____ |
| 19. 貼り ^は りたての障子 ^{しょうじ} をおもしろがってわざとやぶる | _____ |
| 20. 給食の準備をしているそばで、プロレスごっこをする | _____ |

II 下に I と同じいたずらが 20 ならべてあります。もしあなたが、これらのいたずらを行ったことをお母さんが知ったとしたら、あなたに対して、お母さんはどうすると思いますか。

下の(例)にならって  のどこか 1 か所に ○ をつけて下さい。

(例)	強 しく しかる だろう	か るく しかる だろう	な にも いわない だろう
人の背中にシールをはる			

- | | 強
しく
しかる
だろう | か
るく
しかる
だろう | | な
にも
いわない
だろう |
|---------------------------------|-----------------------|-----------------------|--|------------------------|
| 1. 用もないのにデパートのエスカレーターで昇り降りする | | |  | |
| 2. 大人のいない原っぱで爆竹をならす | | |  | |
| 3. 牛乳を飲んでいる人を笑わせる | | |  | |
| 4. ちょっとふざけて友達の持ち物を隠す | | |  | |
| 5. 授業参観日にわざと白いチョークに色をぬっておく | | |  | |
| 6. たくさんある花壇の花を 1 本ぬく | | |  | |
| 7. 雪合戦で泥のついた雪を投げる | | |  | |
| 8. 母親の大切にしている口紅を、クレヨンがわりにして絵を描く | | |  | |
| 9. 給食の時、友達に嫌いな物を盛り付ける | | |  | |
| 10. トンボを糸で縛って、飛ばしながら遊ぶ | | |  | |
| 11. 誰も見ていないので土足のまま校舎に入る | | |  | |

強く
しかる
だろう

かるく
しかる
だろう

なにも
いわない
だろう

12. 信号の押しボタンを渡らないのに押す
13. みんなで先生のあだ名を大声でどなる
14. 卒業記念に学校の机にしるしをほる
15. 屋根よりも高い木に登る
16. 更衣室でズボンおろしのふざけっこをする
17. よそのクラスで授業をしている時に、わざと廊下でふざける
18. 学校の帰り、暗くなるまで道草をする
19. 貼りたての障子をおもしろがってわざとやぶる
20. 給食の準備をしているそばで、プロレスごっこをする

Ⅲ さいごに、次の4つの質問に今までのようなやり方で、あてはまる所1か所に○をつけて下さい。

よく
あった

時々
あった

全く
なかった

1. あなたは家のことでなやんだことが
2. あなたは学校のことでなやんだことが
3. あなたは今までにいじめられたことが
4. あなたは今までにいじめをしたことが

ご協力ありがとうございました